戲作四書京傳餘師

山東京傳著

大樂通用

913.53
Sa629s

089315-001-1

913.53-Sa629s

戲作四書京伝余誌

山東　京伝／著

M18

DBM-0696

序

近ころ世に行るゝ経典餘師と云書を閲よ。暗夜よりはなおでんより上をゆきまいて…と

して盲の杖闇夜の提灯。思ふ所に八兵衛を

も明くし土手八町も照しく使を入れ大門

口より至らしむるもの。やの籠輿ハ此の思ひ入りの

廓のしるべ。雑然鞠躬でうく凝菜組の後る後ハ。

駅路の林おとりものから衣。女郎は…

不器国木曽海道近江の桜素しなる所は

国立国会図書館
29.7.22
338453

913.53 Sa629

序

近来世に行はるる。經典解釈と云書を見るに。
唐梅の花のかをりよりも。上古をゆかしく新味を
しる。育月の枕屏の挑燈。異國の八兵衛と
も呼べし。土手の八幡も呼べし。使を入れ大つ
ぶり至らしむるものやあらん。北を志すものの
爲につゝ。雖然韓坤の使に使ハ。
別深の舟わたるべからざる。高低石ゴの手
石觸。固木曾海道近てそこの板橋を渡る所を

芝蘭の室。鮑魚の肆。とかくかんぢゝをを一緒にして
臭くて入まじ。虛名の鄙俗なるが鼻をよごすまる
蠻帳ゝゝ。そもやア道ハねえ爾

寛政二年庚戌孟陬

山東市隱　京傳自序

戯作四書京傳予誌

目録

大樂　大樂ハ月雪花をかさねふつゝひ色と酒とふたのゝんぐたるをいきぐるをいゝむ

通用　通用ハ質物の通用物の事ゝてひどんくゝんの女郎買をしめぞ

豊後　豊後ハもぐゝ江戸げゝやのこんどゆう

申　申ハ小ゝ色ゝんもの申ゝてゝ物ゝを記ゝるゝゝゝをきゝゝ

興三堂藏梓

京傳予誌并言

近来著書刊行之盛前古所未曾有也。經史百家有用之書暫措。稗史小説殆似無益者。亦陸續刊出。屋上架屋。不知者以為害。而識者有取焉。夫稗史小説之裨益於婦女童蒙。不鮮少矣。是金聖歎所以評訂水滸傳三國志也。歎同業鈴木君。年々魁春。故野史多種。每得雅評。是雖由君精選刊書。抑亦非有大方吹噓。昌克至此。今茲所刻題京傳予誌者。則係京傳翁擬經典餘師。而所載筆行文諧謔。道愚發癖。余知其決非無用之書也。識者一讀。必信余言。不誣。伏望博雅君子賜購覽。重辱高愛。判語何。業過之。當君獨一言書之。雖卷首。併代君謝。愛顧諸彦云。

明治十八年三月　扶桑橋南西涯畏三堂主人識

大樂

意氣狂句

堅衆曰大樂功者之虚言而鬼角入欲門也於隙可見通人為樂氣質者獨賴金銀之損而貧乏次之客者必由是而迷焉則庶乎氣差矣

それ大樂のうをいもうぢ者ハ品川の汐干よりのちぐ

て身代のひろくとるもの思ひきてぞ恵の淵の流ふ
きまりぞてきんてんぐてこの恵の名ぐ紀とあつく
きてぐめくやどろつけどもとそのう紀るり或い上望山
屋山。花鳥山の花見よ幇間藝者を引きつれ流
行音常の猪よりもやたくむやうふ敷くるる腰
花のひりを含ひ武家方の血氣盛あるん春色こん
うぐ紀きぐ紀ふよいまあうんまくぐるぶん猪のい
らぬたのくことと出るけ一日金一分の借馬よ鞍ずく
き猪の浴ぬるこうまいたちまち心の弱のきぐふゆ
るるて大門口よ法ふぐ中の町の赤楊い寛係の昔よ

かるくねど人おすぐかちぐる寒ぐの者ぐ名びく紀
の恵鶴鍔沢の山をすく楊もひんふあくうくら
きて生くる花よくんくるる花のくるくきぐう日よ
まる紫山時ふる和望魚このくの者よちあて心
づきのう夏ぐ年くるるふ今日いつぐくと兎ぐ
くい居濤よ寒ぬけのくくる客人くるる居猪の
るるくいうくをトくうくくれつりい二袁ぐんくう
ぐむうひよ年くきうくべらくをたゆうふるくくうぐい
ぐぐるるるせふんぐふとぐいつるくちくふ関う雲くく
おきやァぐきそんふまぐめをいまぐとマア一ッのむぐ

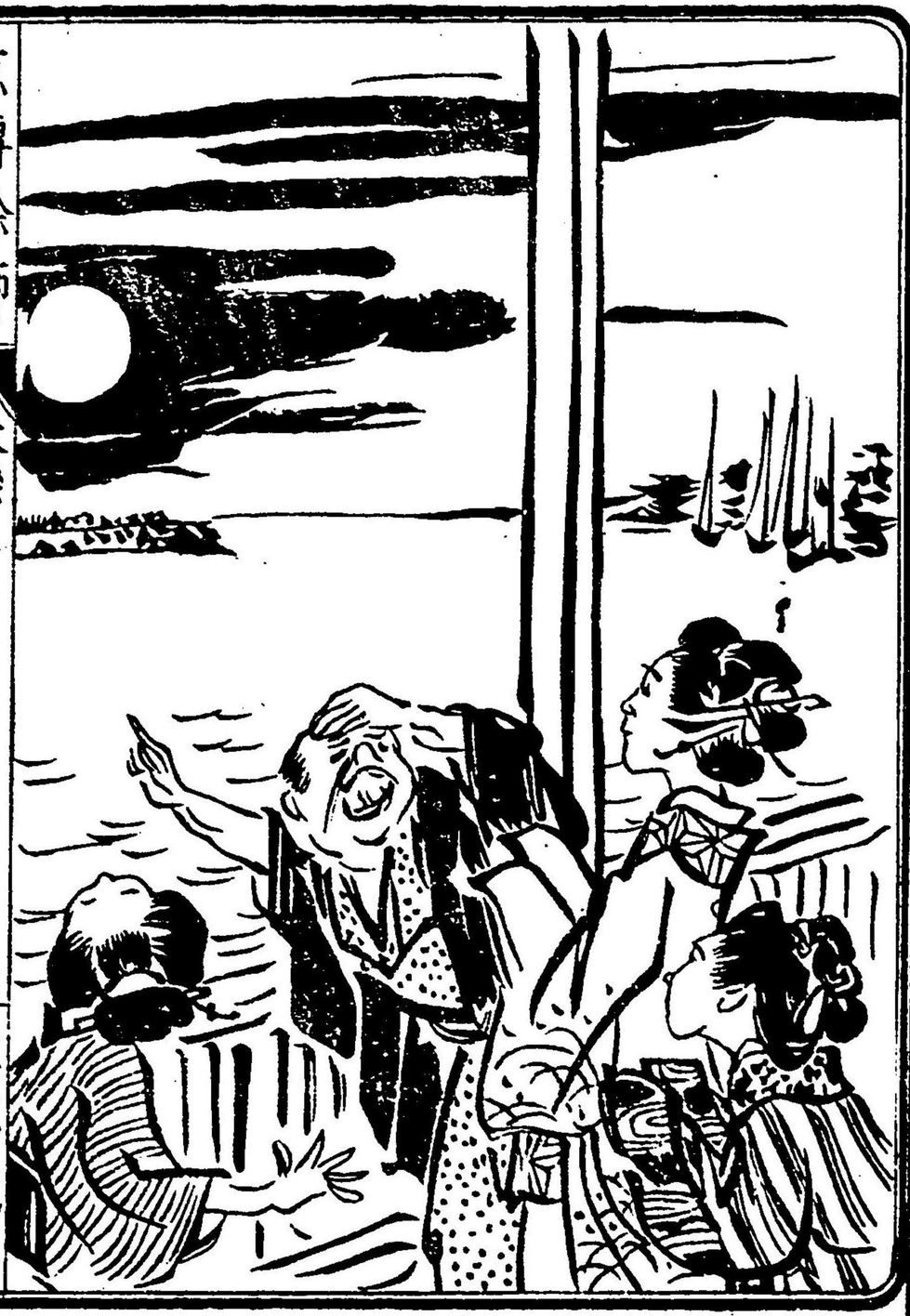
よいイヤ〳〵ちがいがあるまぜんでんどざりませぬ
ものでござるでいたしそうろう名ハ吉原一ッ呑二ッ
のもつかへハ酒ゞ人をのんぐ宿の事いヤ〳〵まゝ
川へ流してあるまひ事也ひ水をそゞまてとりあ
碓をわろ〳〵木乃伊とりゞ蜜人よあつ〳〵遊ぶ
わり夏を墨水よ遊舟をうるめ江戸麗者のひッ
こぬきをつゝみだんかひとりふ祇八人この
人数舟をすもびこそ涼なと口ばそきむ　そゞのう
三弦にてうぐひきそのの大きそぎさのぜん
より陸よひ舟をそそる隠者と呂〳〵まゞ修

328453

若ふかくふかく花あるび蝶おどりくるくるも人不知と活の云いくらくども盛者必衰の理をあらはすをまづや千住の悪臭をつぐさく女を奥は紫と云ところふこゝがつくぬ俗物どやりのあのゆふさんぐもこゝふ臭髏の戯もどやりんよんまでんあるぞと憂世を悟り新ふるも実ハ物あり紀のまけをしこゝ重ねるハそんあめつくこゝ思ひもふ一のふ感るも花ぐ己がんの欲るあふきくぐつぞこくぼをひぬ中つの述懐ぞかしこ陽若も物ぐあるべ生若必滅の場ふくこゝもつくこゝまで陸うら舟を浮ぐる

も岡焼餅の間なくむくハ日もくまぬまや舟よのもこいくしぐ比舟ハ日もくまぬ舟ふらなぐりて呑みをきんと律所の伊ぐ水宮よ知て隅田堤のもふこそこぎまぬ中田屋うむさくやうたびい舟をのつとのぐせくまぬ傍のもふ屋とふもらう屋とつもあまも酒色の二ッふのくことぐるをりう文月ハ廓の炬燵み所を照しの總角よ様ぐあまるくもあり〳〵閑夜こふくん乗色をく初毎ふこのくつぬるてくもくんハ客人の身よりあくぐれ出くく金玉うくとうたぐび惟人の気をつりあぐるぜんま

いづくのけものか業苦の目をゆどろかせさらふ内幕の
からくりとはそもそもびた絡張の炬燵にもつてえめき
ど女郎の落情なる絢のうちにもそもそもこのぞ二の
うつり紙屑子細ユいの石君をさらさらふつ〜たたらと
あもてるこそもそのゆとりい正徳のむ〜中万字屋
の玉菜ゞ遊客のゆめふとゞ〜もでめ〜ままでゞ今
いそもふひきろ〜〜京人を迷もも煩悩のあるだ
ちとなきり近来附合の句ょ〜んをいつるあり
きるりのいろ〜〜焼茶のさ〜〜るもこゆこゝふむゞ
ゆり十六夜の月えるゆいるきも絡〜きる今青の



月をめでゝ詩を作り舞を添ゝ盃を授ぶすた
ゝ夜色里の出でをひらとふさらあり山日深川八幡の
祭礼うけゝ土橋仲町こ橋彩古の石塔ふいてるゆで
一年の大役日月元と祭礼とを兼備しる游び千
日ふうゝ茅も一夜ふゆろぐゝつけのぐせとあり
のうの百姓とある店者あまべ百日の法法も屁一ッ
よ敬ゝ蹴をひらゝお寺様ありこまぞ志加の月ふ
何ゝでつひよい踊者の月元とあらまたり旅行の
月も一風流と南蛮の傀儡ふうちこと面杖坂村田
新竹巳ぐさあゝ脇六の気位よなり髪のまけの

ゆうら安房上総の月元ゝ真ゝ田毎より手を
かんゝゝ美元とる伯母捨山あとゞ日業をさゝし
のまでも沢広ぬゝゝこちらこハ猿と気へむせう
よ云る縁のまもうぬる縁をちらして抱ぶもあり
を外場ゝのいさかある色里まで月の光りのうの
あゝてまあゝの月元ゝかゝ馬橋の月ハ
金ざらいのも馬うゝり赤海安寺こ山船ちのゝぢ
元ゝハあゝぎや今までありつる息るとりゝ化粧の
元ゝでうしてまてハ鬼住里ふけくしゆゝ丹楓の
紅より二ゝの紅閨の紅ふくるまるゝ乗ゝ又こゝちら

まぞ久しく雪うんとして高根ふ居火燈うるきふあ
らぬ志んのうす番の附安よすけぬ氣ぐ別深の妓
をこづきこ雪うんふこうぶあまでとりの白のようか
るひこすぐ傍よりむうの浦のこうう澄糸の石吉
寄もこえ西るなり表紙の角カこッの戲場杉田の
梅見江の浦の月見玉川の能狂まるの紅葉見金沢
の雪うん印雪おうの乗いかぐ人ぐがう見丸地と
りの神立人のおうちうりすたのうとつうるあ
志うまぐも乗い月雪花のこッふとむといひあぐう
つまるこうう女色わどの乗いあ一月のきう紀

とく女郎の狗の焼ふ志うぐ雪の白ありとて抱て
寝こたあうもるく花のめのつまねびむるぐうとうて
口舌もるうぐそまよりも眉い月をもうう肌い吉
をあぐむ紀淡い花をまぐきせ面ふいうまぐのう
まちらぬ美人をえくたのうむわどめ石ぐわうふ
乗のあうんや花より雪子色まうりの乳とうる飢
鐘年よ生まこう人のえるるぐうとうう量の味ある
女色の抜こえうらぬ面志ぐかうと辰人時見う回
りすくう今吋のたのうをこうるふ法まるこうこる
女色ろこけうるりむうも人情ふうるうるりあく

支る闇の若ず女よのろさをそえいれいそぐ池をさ
のむものの色をまのむがめてまるものをそぞと回し
なり兎角拵ぐ〻死いけ原の迷ひと者〻もたり残を
ど〻富丘のまちもあり〻〻施ある〻の〻〻者〻て
も縊し花ぐうろ〻〻いと〻く新今山よ石燈も有〻ぞ
月の明ありとて引寇〻〻ら又て六畳も有〻きぐろ
ぐ雪も面白〻〻ぞさまぐたの〻〻〻い女色ふとぐむ
るとい〻ひまぐら〻つまる〻〻〻ろ金ぞ有金さへ泛
山あまぐ居なるも奇戈と思をまいゆ〻紀も考〻
又人鶴ふのり鉦面素じ飯筆〻ら猪を出〻石と

ゝく羊とあるは仙郷ゝゝゝゝ
天台のゝゝゝゝ中をとゝゝゝ
ひとゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝとゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ

むべなるかな　やはり　すでに　日本一の源の　協和とのたまや
さまを　書　繪解集　しなる　地も　今日い　忽一河の　流まと
変ぞ　こそ　清水あらぬ　盛衰の　世の中を　天の　あらら
しむる　ところ　あり　ぞん　なそのどや　ナアと　歎息する　も
をのまぐをひとみの　あるまじ

大樂畢

通用

若衆曰無錢之謂通不迫之意氣狂句

謂用通者半化之貧乏用者

紋日之出入其錢乃寛永年

中通寶大夫恐其久而絶也

故筆之於文以授格子其子

宵言無理中亂寢客衆不逢

其夜爲千里語之則渡苦界
省連則恨藏於店下畧

そを通といふんぞ列るよいてることあり体をのつく
人ふるつ之を聖人と渇林を作く人まろつあまをを
通人と渇と氏言ごつけくえまびよく今の通と称
まる若よあくまり結まで又も金銀いのろまふゆ川で
も法山よ持く所る者り乳餅いあく雑は唯通と世
夫との呂別を知るを作く通と渇ひ通と世まとの
呂別をまくぎるを世夫といそんろ予ろふ通用の二

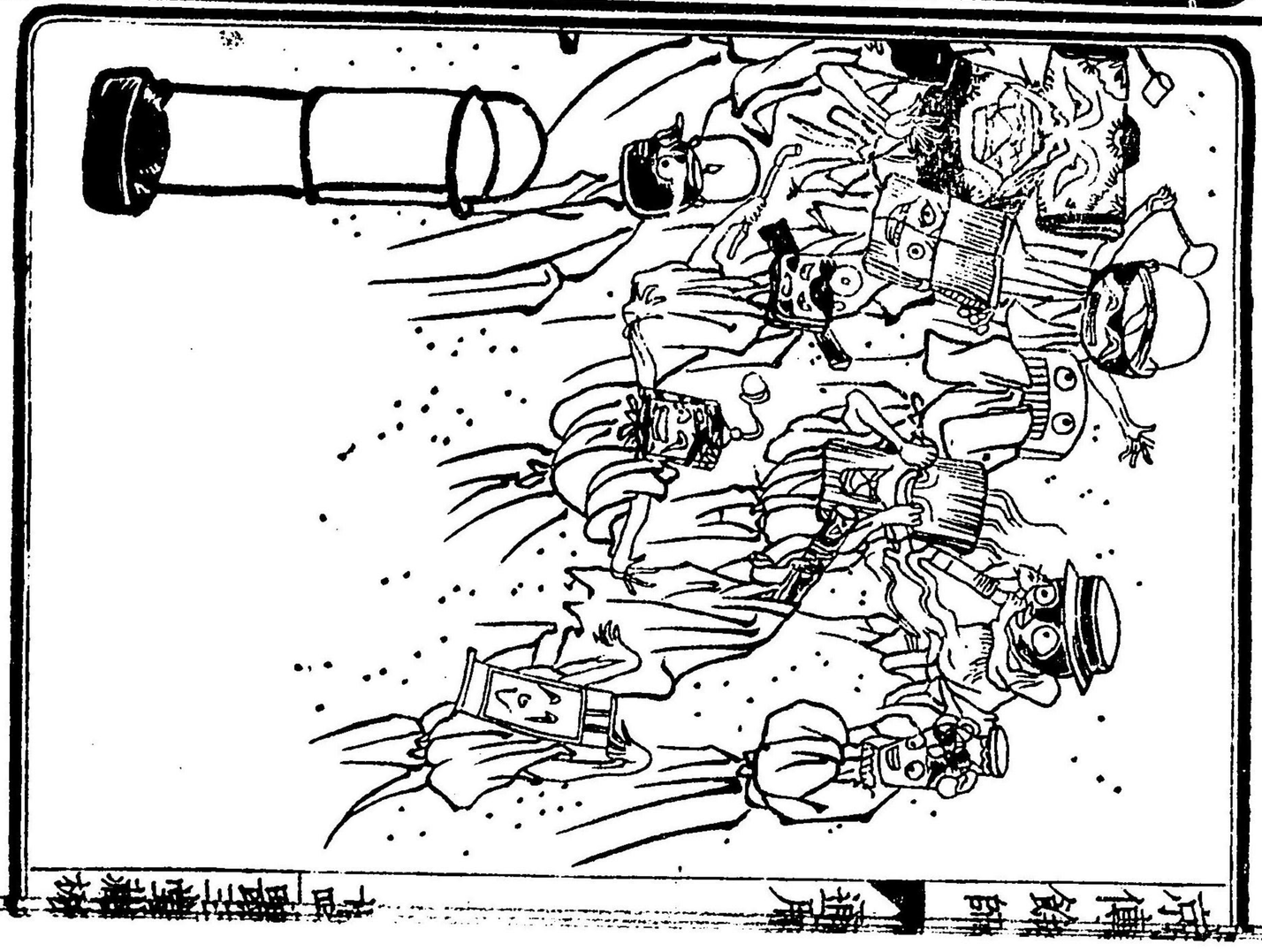
宮を作くいまふ小まをたんを〜〜風漬せん支万里
を井といひ井を十あ〜せ〜通とひ呂をの〜考
まびふ万つまの外までもよくせうちまると通と云べし
又書の首よりきれくのく未までも金〜ていまが
たのろ紀るな紀を通とひのべ〜ぬ茶よこぬ六通
あり井よ圓通あり象の仏人も通をうるみて下界
たまけと矣まと狐も通万うせそい麹町の市ふさらさる
吉原通深川通芝居通とひもよくまを作る
をひのべ〜又用の宮をひそんん天北金功ふ〜美和
宜用ふ〜又人よ用ありとん人用らく附い下女もた

ちまちに彩造模とあとぐを用らまぐる時に麟
麟も魯人の古傘に色ぬきを牡丹紅葉の類とあら
ん又傾城の言に金銀をゆゝしく紋日物日をた
のむことを惜く用とらるる又名用ゆとうれる
丈に用のあつためしなし酒屋の用御用のゆゝ
車賃ことを笑ふにつとも流布〳〵又通用とつゞく時に
贈物の通用あのるゆゝこれふつゝく此日一ッの寄
法あり名ふ表法を爲ることいふ者ありまた身代に飯
器に車を表りるくらゆのくらゝなるべ伽くらゝ
らぞ一壁に傾城買に身をゆだねく花ふめで月ふ

うゝを面ふ表のび嵐ふ面ひ通ふの泉ひくゝ
ねび者の暇者をゝるゝとせぞえ旦の座のたれよ
り左こ十日の詰表者ふ表ゝまで月雪花のこッ蒲團
のゝふ座ゝ七他ふ表ゝりゝもそのとゞゆるゝをを
表ゝ而后の世ふ踏笠きて義梅の別業ゝたれ
ゝ孤獨のくらゝも世をあぢふまねゝる処ふゞゝ
されば昔ゝゝる杵屋流の三味線もゝの相メに
けまびゝ書の潤ふあらそぞ夢世を楽チヨロ
の常ふ結び色鄙も仏安ゝまびひとゝ不住吉やの
煙管ふ仏のゆふを通ゝふ人間居ゝて石言をあそ

のいゆるめを考ふるとそれねばうんしやくも片肌をのて
脚ひふをもちるき袴のいまだぐるるも外山のうちとふ
ひとしくだんぐふきうくちくあり額ぬれあぐしも
いうしう角とまくゆうさうふ眠るを枕をおとうとをを
雅ぞ時宗ふあらねば祐成が遊見ふもいのうちぐく
吋あらねば池の水鏡とるおのてまとを蒙うううう
と首をいのぐまびというそもいうふ美顔美形のだけあ
あらそを出さり風をおとうぐれくをそろ
さたとんうくあく濁乱の息きるる暴をつらぬく
焉ふうを一日えるより乳も絶も天上ふぐさらふ人

ふ地ふあるるけるぐ彼化物のうち恐とおぐ紀ぐるるげ
ある声くくまけるふいうふ焉をかあらそおそるくとるう
を赤くふ赤ふ水のむくしあ濁ふあるうびさる平赤の一門
まもいのらぐ化物屋敷の煙掃くもふく俗あの結ん世中
たをけどりの為ふぐち彩されく縄目の和をうけ七ッ屋
のこらふきづめらをくうかくもやらぞ濁もあぞ迷ひ
弔うくそや八ケ月ふあぐりふ吏昔ようう俗と云ねうれふ北ぞ
戦場ふ人殺あり淫婦ふ言俗あり信重を俗ようく
とん女房が自殺を切る付の拵云為あくて清水の森
春と同日の海ありむくくさる何系の上人とのや十云



を貸よとをくる事あり〳〵ゞ貸を十貫のうち一貫を。
どくだを取よし上人生涯九貫のこゝまで〳〵くるよりく
九貫寺と云寺号何分わろ今ふのとりたるよりを
ゆくあるもバ佛の方便とも有り又番と云字を貸ふ
をきたる連歌師もあるもバ風流のなもなまり古人
消るハ己ゞ名を貸ふをきたる時あり新田義貞ハ
こゞねづくり礼をかを刑部鎌倉稲村ゞ崎の海中江
貸ふ志ゞ〳〵軍の利運を祈神よ仁ゞ〳〵〳〵
祈神こゝを感感〳〵祇をかを海上ようのこと流を〳〵
とゝやこを貸ふ流〳〵と云云祈〳〵いは付ようのゆ

ゆゝけを今よをを貸利ゞ流〳〵ゆも山新開あるを
〳〵又貸ふとゝの言ふゆて〳〵萩の上信萩の下貸ふの
り或い藤と下の入〳〵あり天地も又貸屋の度を云バ
をを〳〵人のゆ礼貸ふをゝらを火ゆ堂人ハ有板蘭
字い〳〵ゝの板と挽れよたゞ〳〵ゝあるを或ハ貸ふをる
とゝの言あり是十の字の屋をまゞをバ七の字ゝある
是ようをゝ〳〵ゝゞつけるよ〳〵七ツ屋と晩ゝ
刑部ゆゝんなりをゝもをゝふゝんりゝある付ハ唯のび
をまげ〳〵ゝをれバそをゝとさゝるあり志ゆをゝを
凡まふあ〳〵ゞや屋云ゝあり〳〵〳〵貸店を作る

鋪とのひ供奉を典侍とのひ供奉を南殿のぞと云俗
俗あり国我〻人持ものの身ぐりふたち〻喜うんをん
とらん火鼠の雑衣をもてのりのあるふ今ハ初のまぐ
叔婆ふ身をのちつぐ〻やとも是れば我家をとる
むる事ぞ〻武を女房を身ふ世ん者ふ報ちゆ
らもと〻家義を家供よりのもとをみ女房も多更よる
ひ〻ちつ保とあり筆弱下臈禅事で供入して苦界
十年損料屋の為ふ〻むあり武ハ初陸奥の代
ふ後をとる〻めあぐ江戸ッ子の風の究の屋きあと
藤家のとぐつをそ〻まあぐらまをと金ひゆ〻うを

一人りの娘を人供ふ入〻情実ようちとみハ娘
のとぐ〻ひるる家をとの〻て家の礼を罪をぐ〻
ろ人〻らのらひとるる仕昌せの家るを報をもあ
り武士ハなを〻ぐあらぬ大小もまげ出ハちぐふ
んの仏像までもまげるげふ供をを当てうけるるふ
きハ恩をうけ〻恩をふらぐるげで〻ありとても我
つ〻〻ふ〻ぐ利あげをさきんよちぐもなるもべけ
身ハ亂よとひさうもつひふ難ハ抑系の干店ふさら
さきん此恨をちらさんまハ貧乏神の未社とあり彼
恩ふふの徒ぐ皆同ふとけりぬ出ぐ是者とるるん

没ハさのもあやまれもせうちの作なれバはるをかるう
きうせ世の中の不埒者ども不借てのらひうけのど
さんあるの亡国雲借をとゑぬゆうふんぶさせんと
借屋地獄の業沢大ゑふ志ぢーのいとをこひこゑを
すぐあるとをもせるぞやとヒウドロ〜のおさぐりう
かきけそでくしてあるぞして南風ふあるさ海月のお
とくふうりくとうせあるる高有る姫乃やどんかそろ
しかるしぐ借ものれ此夫ふ遠ひーるる古今ま奇ある
るるとび彼等ぐ述懐あるりくあるくる病をかぐえん
しを予よかるるしぐ彼借ものの結ぶいひーめくのーを

根の為用ありくく借をを為をとるけるんぐけなきを
男をうけくひぐ紀工面をせんぬるきーを志らぬふ
あるるぐーそ付ハ必ぞ借の外然ふとるつ紀くこしぐ
男をるぐくをとうたぐひあしーを重をひろみるら落衣
を深よ扇ふるあてと裾まいの重を繋ふ為てる深をん
せるんと濃ぐども八月ぐたてべ深るるり利上の志ぐら
をせんよりるつまる不ハ係ありいろは短志の志の字の一
句ま借ををるぐ上をよてと女房をいるーめーも不宜
乎

通用畢（ツウヨウヲハンヌ）